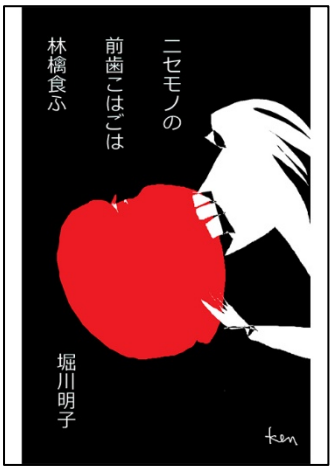
■今月の特選句

2019 年 1 月

大夕焼け地球の裏側覗きにゆく

鈴木和枝

作者は夕焼けと同化している。夕焼けは、ただ沈んでいるんじゃない。向う側を覗きに行っているのだ。童心は年齢に関係なく、詩につながるもの。



ニセモノの前歯こはごは林檎食ふ

堀川明子

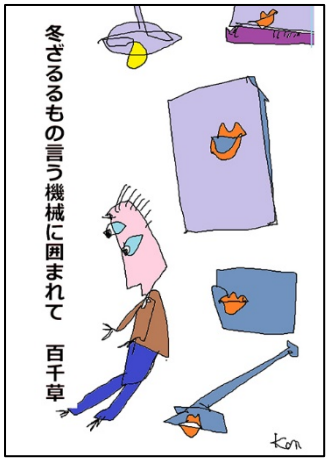
林檎を齧って前歯がポキリなんてことになるやも。その心配を正直に書いたね。それでは選者も一句。「大胆に林檎齧って歯のポロリ」。

美しいけれどもしやの毒茸

吉川正紀子

　毒茸は華麗で魅惑的。妖しい魅力は誰彼を騙すためと気付くにはそれなりの人生経験が必要。あくまで「毒茸」のことだが女性を重ねるのも可。

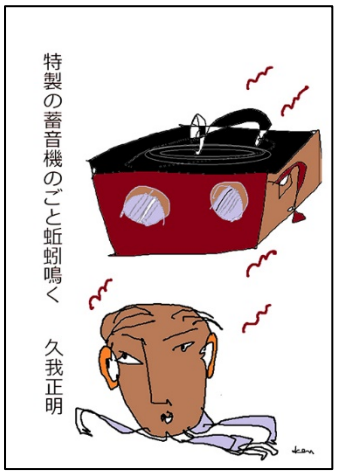
滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。



冬ざるるもの言う機械に囲まれて

百千草

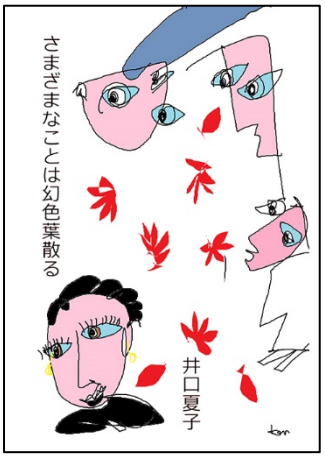
日常生活に「もの言う機械」が登場して久しい。最初こそ違和感もあったが、いつしか慣れて便利ささえ感じる。しかし、その慣れこそが寒々しい。



特製の蓄音機のごと蚯蚓鳴く

久我正明

季語の「蚯蚓鳴く」は、実は蚯蚓ではなく「オケラ」の鳴き声だとか。作者は 「特性の蓄音機」の音と思った。知識や固定観念でなく感性で勝負。



さまざまなことは幻（まぼろし）色葉散る

井口夏子

俳句の素晴らしさは、わずか十七音で哲学を語れること。眼前の自然を見つめ、来し方を顧みて、我が人生を一句に総括できるのである。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

■今月の秀逸句　（・・・七七をつけてみました）

毛糸編む暇を持ち寄る女かな　田中　勇
・・・暇を持ち寄るなんて巧いね

しゃべる人マスクをしてもよく喋る　井野ひろみ
・・・飛び散る唾をさえぎるマスク

袖口をコーティングする水つ洟　小林英昭
・・・叱り飛ばされ北風に泣く

重すぎる大根買つて水買つて　山本　賜
・・・階段上る筋トレの日々

家計簿の捨てるなと言ふ大根葉　壽命秀次
・・・蜜柑の皮は冬至風呂にも

小春風ジャングルジムを抜け来たる　工藤泰子
・・・ひとつひとつが正方形か

酒焼の赤鼻走るクリスマス　荒井良明
・・・トナカイの橇とめて一杯

安売りにも慣れつことなり年の暮　泉　宗鶴
・・・衝動買いの次は断捨離

シロ走る我はつまづく冬の朝　赤瀬川至安
・・・犬に責任転嫁しちゃ駄目

花八手カリフラワーになりきれず　日根野聖子
・・・パセリはいつか大樹になるも

人日の核弄ぶ地球かな　西をさむ
・・・近づいてゐる地球の最期

忘年会三日続けての体重計　石塚柚彩
・・・新年宴会四日続くぞ

懇懇と諭す自分は咳こんこん　土屋泰山
・・・狐の親も諭すコンコン

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

■今月の滑稽句

＊今月の特選句･秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

冬うらら絵付け終えたる素焼手に	相原共良
鮟鱇に夫の顔を重ねけり	相原共良
日の燦燦風とダンスの秋桜	相原共良
煤逃げにしっぺ返しの家事放棄	青木輝子
大ぼらに臍が茶沸かす年忘れ	青木輝子
初詣神がとまどう国際化	青木輝子
導師かぜ声代役は虎落笛	赤瀬川至安
夕闇の十八番ホールに狸	赤瀬川至安
闇汁に十字をかくすキリシタン	荒井良明
クロイツェル･ソナタそなたに冬の朝	荒井良明
菊の香や同じブランドしてをりぬ	井口夏子
すっぴんを気にもかけずに日向ぼこ	井口夏子
時ならぬ開花宣言老い化粧	池田亮二
古畳古女房もよし菊日和	池田亮二
長崎で本物に遭ふ石蕗の花	石塚柚彩
冬ぬくしタイヤ交換忘れをり	石塚柚彩
番外の相撲は三役貴ノ岩	泉　宗鶴
ともかくもあなた任せのおらが春	泉　宗鶴
少年の隠れて噎せて若煙草	伊藤浩睦
新嘗祭自撮りしてゐる皇太子	伊藤浩睦
囲い者黒板塀の冬構	伊藤浩睦
一筒か四七筒か月冴える	伊藤洋二
和平かも昭和平成こぞ今年	伊藤洋二
一歩ニ歩千歩万歩の冬遍路	伊藤洋二
雑炊や公私混同なき人事	稲沢進一
机には本を積むだけ蜜柑むく	稲沢進一
湯豆腐やとりあへず開ける蓋	稲沢進一
平成の最後の天皇誕生日	稲葉純子
手袋を脱ぎて解放指五本	稲葉純子
マスク使へずヴィンセント.ヴァン.ゴッホ	稲葉純子
寝息から鼾に変わる炬燵かな	井野ひろみ
果つ日記携ふつもりあの世まで	井野ひろみ

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事･写真･イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写･転載等を禁じます。

ゴミつつくカラスと目の合ひ冬の朝	上山美穂
カサコソと枯葉の恋の物語	上山美穂
年賀状夕陽が初日になりすまし	上山美穂
柚子ふたつみつ贅沢の冬至風呂	梅岡菊子
洗濯ものをきちんと畳めば冬ぬくし	梅岡菊子
葉牡丹の渦の巻きこむ陽のぬくみ	梅岡菊子
散り紅葉一つ拾いて髪飾り	梅野光子
夫のなき買い物ひとり年の瀬に	梅野光子
小春日や猫もお婆も背を丸め	梅野光子
露けしや言へぬと言はぬは違ふこと	太田史彩
下駄箱に履けぬ靴あり今朝の冬	太田史彩
足の指曲がりしままに冬に入る	太田史彩
小春の日ひつじのやうな雲ひとつ	小笠原満喜恵
宅配の荷物の中に新暦	小笠原満喜恵
渓谷の紅葉遊山のほろ酔ひに	小笠原満喜恵
多彩なる海色今や冬ざるる	岡田廣江
先客は隣の女猫日向ぼこ	岡田廣江
椿の実花の形をしてをりぬ	岡田廣江
安売りはしませんこの身歳末セール	小川飩太
小春日や遊んでいても減るお腹	小川飩太
焦るにはまだまだ早い十一月	小川飩太
寡黙なる夫の好みし鉦叩き	川島智子
冬立つも小春とまがうこの温さ	川島智子
蟷螂の雄を食うほど愛すなり	川島智子
ほら吹きが大ぼらを吹くおでん酒	久我正明
恋のこと海鼠に語る人魚かな	久我正明
海目指すシップボトルや碇星	工藤泰子
むら時雨打つ園庭のおかめ笹	工藤泰子
ピカソなり母剥く梨の多面体	桑田愛子
恋ままならず木犀の香の強くして	桑田愛子
欠けたるは満ちるためなり冬の月	桑田愛子
姑の舌も焼けよと根深汁	小林英昭
ボーナスは妻の口座にはや帰宅	小林英昭
探り箸して銀杏の茶碗蒸	近藤須美子
その赤に足止めさるるいちご草	近藤須美子
日本の宝黄金の稲穂こそ	近藤須美子
紅葉狩帰れば我が家紅葉濃し	佐野萬里子
「大雪」に晴天洗濯満艦飾	佐野萬里子
落葉掃き競ひし隣りの媼亡し	佐野萬里子

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

柏手の皺寄る音や初詣で	下嶋四万歩
手焙に懺悔の心育ちをり	下嶋四万歩
大根に踏ん張る力あるらしく	下嶋四万歩
猟犬は戻り吾の股間嗅ぎ座る	壽命秀次
スムーズに妻を撒いたぞ酉の市	壽命秀次
物臭と言はず小心懐手	白井道義
残業は禁句勤労感謝の日	白井道義
赤い羽根付けて善人ぶる男	白井道義
堀こたつ退屈そうなボールペン	水夢
冬紅葉睨み利かせる鬼瓦	水夢
箒目の整う庭や年用意	鈴鹿洋子
遠慮なく綿虫入る座禅堂	鈴鹿洋子
農婦なんて誰も知らないエスカレーター	鈴木和枝
落葉踏む即座に受け取る万歩計	鈴木和枝
競り声に脚踏ん張って松葉蟹	髙田敏男
煤払鉄砲玉の子が二人	髙田敏男
変人もだいじな客とぼろの市	髙田敏男
究極のナルシストたれフィギュアスケーター	高橋きのこ
口割らぬ実石榴スーパー店頭に	高橋きのこ
更生を誓うとの文春来るや	高橋きのこ
木枯や友愛セールは人で混み	田中　勇
怪しげな電話のかかる小春の日	田中　勇
百まではまだまだ先と温め酒	田中早苗
猪の害には非ず人の害	田中早苗
秋の旅アクセルブレーキ踏み分けて	田中早苗
冷え切った体に生姜湯流し込む	田中晴美
木の葉髪これ以上は無理女性です	田中晴美
遊びいし子らのちりぢり夕焼ける	田中晴美
片や不満此方自慢の日向ぼこ	田村米生
木枯の悪さや庭木丸裸	田村米生
山眠るみんな無呼吸症候群	田村米生
くさめして七十五日指を折り	土屋泰山
手袋をしたまま金を取り出せず	土屋泰山
止り木の目が種選ぶおでん鍋	飛田正勝
鮟鱇の七つ道具に迷ふ箸	飛田正勝
鍋にしてまたつつかるる新豆腐	飛田正勝
元号は何処一月のカレンダー	西をさむ
くく鳴いて第九の響く寒九かな	西をさむ

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

バタークリーム今や死語なりクリスマス	花岡直樹
師もおらず走りもせずに去年今年	花岡直樹
湯豆腐やビールの冴えを引き立たせ	花岡直樹
暖冬に慣れし身こはばる急冷に	林桂子
災難とさよならをせむ忘年会	林桂子
師走となれば身の内外をクリーニング	林桂子
鶏の受難の日なりクリスマス	原田　曄
西郷をみがきあげたる煤おろし	原田　曄
腰の上のねこがふみふみ小春かな	原田　曄
褒められて一際赤き冬紅葉	久松久子
小春日や僧のジョークに笑ひ合ふ	久松久子
寒鯉の水肥りして沈みけり	久松久子
選挙結果の馬鹿馬鹿しさよ大根擂る	日根野聖子
お縄となり晒されてゐる干大根	日根野聖子
温暖に葉を落としかね落葉樹	廣田弘子
ベランダを飾るのれんやつるし柿	廣田弘子
早々に葉を脱ぎ落したる熟柿	廣田弘子
プーチンの北方領土冬ざるる	細川岩男
十二月自国ファーストG20	細川岩男
やっとこさ今日まで生きて十二月	細川岩男
労働の労を希釈かおでん酒	堀川明子
しもやけの指をねじこむハイヒール	堀川明子
晴舞台のレッスン中や笹子鳴き	本門明男
表裏見せて舞ひ散る紅葉かな	本門明男
小春日やあちらこちらの生欠伸	本門明男
聖夜ですやさしい嘘で別れます	南とんぼ
生存照明やはり書きます年賀状	南とんぼ
ふたつみつ帯解き初めし紅椿	南とんぼ
癖多き父けつたいな大根引く	椋本望生
RふとLに抱かるる雪女	椋本望生
ぶつぶつとストーブの勘定奉行かな	椋本望生
天高しさらばこの世よ樹木希林	村松道夫
トランプの自国優先鵙猛る	村松道夫
曼珠沙華浮気心はとうに捨て	村松道夫
あの人も昔は毛糸編みしとか	村山好昭
闇汁の色の黒さをかきまぜる	村山好昭
音痴にもマイク回して年忘れ	村山好昭

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

短日を佇むカバの柵の前	百千草
もの売が足もつらせる十二月	百千草
なにもかも猫背にさせる師走風	森岡香代子
つたなくも芸術点を初雪に	森岡香代子
ぼたぼたとこの世をふさぐぼたん雪	森岡香代子
論客の俳人がゐる忘年会	八木　健
この家の主役は犬か年賀状	八木　健
お歳暮は高からず且つ安からず	八木　健
初夢にムンクの叫び腰抜かす	八洲忙閑
元朝のポストに新聞はみ出でて	八洲忙閑
爺婆に赤児託して女正月	八洲忙閑
土曜まで騙し騙しの風邪気かな	八塚一青
飲み会を忘年会と言える月	八塚一青
見ぬふりも最早ここまで煤払い	八塚一青
鳥肌の立ちたる零や豹毛皮	柳　紅生
空港に世界の時刻神の留守	柳　紅生
東から西へ軍配神の旅	柳　紅生
幸せの種を蒔きたやクリスマス	柳澤京子
まか不思議激痛緩和年の暮	柳澤京子
粥食の続きフラフラ年の暮	柳澤京子
間に合うか普請の大工冬に入る	柳村光寛
銀杏散る小判であれば生きられる	柳村光寛
平地でもでもを幾度も雪予報	柳村光寛
吾子は湯たんぽひとつ枕に寝ていたる	山下正純
山寺の厠賑わう寒参り	山下正純
指先の乾燥スマホ不感症	山下正純
立ち話ぐつたりしてきた新豆腐	山本　賜
おこわ売る米八さんの栗おこわ	山本　賜
ハロウインにお株とられて冬至南瓜	横山喜三郎
お年玉何度も孫へ認知症	横山喜三郎
出稼ぎの力もかりて秩父山車	横山喜三郎
婆ちゃんのウォームビズなりちゃんちゃんこ	横山洋子
五十年変わらぬくせ字の年賀状	横山洋子
枝下ろすばっさり冬の空広げ	横山洋子
枯葉散り実は口紅の色をして	吉川正紀子
寒風に耐えて干柿蜜柿に	吉川正紀子
餅のカビ削り知らるる戦中派	吉原瑞雲
煤払ひ透かし見てゐる貧乏神	吉原瑞雲
新元号いよよ来たりて年迎ふ	吉原瑞雲
蒸饅頭あと一分で出来上がる	渡部美香
着膨れのつま先深深体育館	渡部美香
星冴ゆるハンドベルの音硬くして	渡部美香

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。